



Jumpa Lagi Kota Baru

(また会いましょう コタバル)



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

財団法人 鹿児島県国際交流協会

はじめに(第20回を終えて)



鹿児島県青少年国際協力体験事業
実行委員会 会長

弓 場 秋 信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

「世界に活かされている日本」、そんな思いを強くした青年海外協力隊員時代でした。日本の内なる国際化の現状に危機感を抱き、青年海外協力隊事業発足25周年を機に、協力隊員の活動現場に中高生を派遣する全国初の事業として、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県OB会、財団法人鹿児島県国際交流協会の3者で構成する実行委員会でスタートし20年を迎えました。その間、財政的な面で継続が危ぶまれる時期もありましたが、第6回目からは県民各層への啓発を目的に自治体との共催。さらに第14回目からは1人でも多くの中高生の派遣を可能にすべく、民間企業に協賛をお願いし今日の事業主体となりました。これまでにマレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオスの5カ国に県下一円から、今回の16名を含め236名の中高生を派遣しています。

2011年の派遣国は、複合民族国家マレーシア。人口約2800万人、天然資源に恵まれ、ルックイースト、民族融和、外資導入、政治的安定などの政策が功を奏し今や中進国と呼ばれ、2020年には先進国の仲間入りを目指す国です。

鹿児島市・鹿屋市・霧島市・南さつま市・枕崎市・いちき串木野市、南九州市推薦の12名と実行委員会推薦の4名は、2回の事前研修でマレー語、マレーシア事情、青年海外協力隊等の国際協力、そして日本・鹿児島について学び、平成23年7月24日から31日までの7泊8日、首都クアラルンプールとクランタン州コタババル地区に派遣しました。

団員は、国際協力機構(JICA)クアラルンプール事務所で、「国際協力とは、開発途上国の現状」について学び、ホームステイ先のクランタン州に移動しました。クランタン州は、マレー半島東海岸の北部に位置し、マレー人が90%以上を占めるイスラム色が最も強い人口210万人の州です。イスラム教徒が、モスク(イスラム寺院)に出かけ礼拝を行う金曜日は、公共機関も休日となります。

州都コタババルからバスで1時間、田園風景が広がるクバンテラガ村での4泊5日のホームステイ期間中、養護、作業療法士、体育、ソーシャルワーカーとして活動している4名の協力隊員の活動現場を訪問・体験。学生との文化交流、同世代との語らい、村での農業体験、右手で食べるマレー食、水浴などを体験しました。それらが綴られた報告書「Jumpa Lagi Kota Baru(また会いましょうコタババル)」をお届け致します。同世代を始め多くの皆さんの目に触れる事を希望致します。

終わりに、本事業実施にあたりご支援ご協力を頂いた共催市、協賛企業、国際協力機構JICA九州、JICAマレーシア事務所、クバンテラガ村、クランタン州で活動中の青年海外協力隊員を始めとする多くの関係者に対し心より感謝申し上げます。今後とも本事業へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

も く じ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場 秋信

ごあいさつ	1
鹿児島県商工労働水産部観光交流局長 福壽 浩	

第20回（平成23年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要	2
--------------------------------	---

参加団員等名簿	3
---------	---

スケジュール	4
--------	---

地図	5
----	---

体験事業総集編	6
---------	---

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

団員が感じたこと	15
----------	----

「マレーシアへ行って」	中 尾 聖
「マレーシア」	坂 元 智 樹
「ホームステイから学ぶ異文化理解」	吉 田 侑 可
「マレーシアの温かさ」	鶴 丸 木綿花
「新しい友達」	松 元 春 香
「マレーシアに行って」	吉 嶺 彩 夏
「マレーシアで感じ、そして今考えること」	深 川 桃 花
「マレーシアで感じたこと」	瀬 川 明
「国際協力体験事業に参加して」	楠 元 崇 孔
「マレーシアに行って」	悦 田 愛 里
「マレーシア異文化交流に参加して」	岡 祐 大
「気付かされたこと」	中 屋 諒 緒
「マレーシアに行って」	中 野 桜 菜
「時感」	豊 留 春 平
「マレーシアでの研修を通して」	須 賀 雄 海
「研修で得た限りない宝物」	園 田 広

団長報告	31
------	----

「輝く未来への一步」

弓 場 秋 信（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長）

同行者感想	32
-------	----

「感動・成長・期待！マレーシア見聞録」	竹 内 文 紀
「気づくことの大切さ」	永 山 麻 理
「クバンテラガ村でのホームステイ」	山 下 美 穂
「当事者の一人として」	山 城 裕 司
「同行取材を終えて」	松 崎 真 紀

新聞記事（南日本新聞）	37
-------------	----

特別寄稿	43
------	----

「第2回参加者」	江 並 美 香
「第3回参加者」	濱 田 孝 子

参考資料

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要	45
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績	46

ごあいさつ



鹿児島県商工労働水産部観光交流局長

福 壽 浩

平成23年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、鹿児島の青少年を開発途上国へ派遣し、それらの国の経済的・社会的発展に貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や、現地で協力活動体験を行うことで国際協力に対する理解を深めるとともに、現地の人々との交流を通じて相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成することを目的としております。

成長著しいアジアの時代の到来を見据え、同地域の環境、経済、多様な文化などに精通した人材を育成するため、県でも様々な施策を積極的に推進しておりますが、現代の国際社会を取り巻く諸問題を解決していくためには、国民一人ひとりが自らの国や地域について見つめ直すとともに、異なる文化・習慣・考え方などについて理解を深める姿勢が重要になってきております。こうした観点から、本事業の実施は非常に意義深いものであります。

第20回目となる今回の体験事業では、団員の皆さんは、7月24日から7泊8日の日程でマレーシアを訪問し、コタバルを中心に現地視察や協力活動体験などを行いました。試行錯誤を繰り返しながら活動に従事する青年海外協力隊員の姿を目にし、また、ホームステイや地元の学生との交流等で現地の方々との心のふれあいを体験したことで、国際協力や相互理解の必要性、重要性を実感されたのではないかと思います。

自らの目を見て、感じてきたことは、実際にマレーシアへ足を運ばなければ経験することのできない大変貴重な経験です。この貴重な体験で得た感動を心に深く刻み、今の自分たちには何ができるかを考え、是非身近なところから取り組んでいただきたいと思います。そして将来、国際性豊かなたくましい若者に成長されることを心から期待しております。

最後に、この事業を主催された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会を構成する各団体及び実施に当たり御支援・御協力をいただきました国際協力機構並びに青年海外協力隊の皆様へ心から感謝を申し上げますとともに、関係者の皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

第20回（平成23年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- 1 **主 催** 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
(助)鹿児島県国際交流協会
- 2 **共 催** 鹿児島市, 鹿屋市国際交流協会, 霧島市国際交流協会,
枕崎市教育委員会, 南九州市教育委員会,
南さつま国際交流推進協議会, いちき串木野市国際交流協会
- 3 **後 援** 鹿児島県
鹿児島県教育委員会
独立行政法人国際協力機構九州国際センター
- 4 **協 賛**

(株)鹿児島銀行	鹿児島空港ビルディング(株)
鹿児島トヨタ自動車(株)	鹿児島ヨコハマタイヤ(株)
キンコー醤油(株)	小正醸造(株)
薩摩酒造(株)	(株)下堂園
太陽運輸倉庫(株)	南国殖産(株)
(株)Misumi	(株)山形屋
弓場貿易(株)	
- 5 **事業の流れ**

4月～5月	募集・団員決定
6月4日(土)	第1回事前研修
7月2日(土)～3日(日)	第2回事前研修
7月24日(日)	出発
7月31日(日)	帰国
8月3日(水)	表敬訪問
8月27日(土)	報告会
9～10月	報告書作成
- 6 **派遣国** 派遣国はマレーシアとする。
- 7 **実施期間** 派遣期間は、平成23年7月24日(日)～7月31日(日)
- 8 **派遣人員** (1) 参加者 16名
(2) 引率者 6名

参加者団員等名簿

■ 団 員

	名 前	性別	学 校	学年	名 前
1	なか お尾 まりあ 中 尾 聖	女	鹿児島市立吉田南中学校	2	鹿 児 島 市
2	さか もと とも き 坂 元 智 樹	男	鹿児島市立長田中学校	3	鹿 児 島 市
3	よし だ ゆ か 吉 田 侑 可	女	鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校	2	鹿 児 島 市
4	つる まる ゆ う か 鶴 丸 木綿花	女	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	2	鹿 屋 市
5	まつ もと はる か 松 元 春 香	女	霧島市立国分中央高等学校	1	霧 島 市
6	よし みね あや か 吉 嶺 彩 夏	女	枕崎市立桜山中学校	3	枕 崎 市
7	ふか がわ もも か 深 川 桃 花	女	枕崎市立立神中学校	1	枕 崎 市
8	せ がわ あきら 瀬 川 明	男	鹿児島県立加世田高等学校	3	南 九 州 市
9	くす もと たか よし 楠 元 崇 孔	男	鹿児島県立川辺高等学校	2	南 九 州 市
10	えつ た あい 悦 田 愛	女	私立鳳凰高等学校	1	南 さ つ ま 市
11	おか ゆう り 岡 祐 里	女	いちき串木野市立市来中学校	1	いちき串木野市
12	なか や りょう た 中 屋 諒 大	男	いちき串木野市立串木野西中学校	2	いちき串木野市
13	なか の さ お 中 野 桜 緒	女	私立鹿児島純心女子高等学校	2	始 良 市
14	とよ ども はる な 豊 留 春 菜	女	鹿児島県立鹿児島松陽高等学校	3	日 置 市
15	す が ゆう へい 須 賀 雄 平	男	鹿児島県立種子島中央高等学校	3	中 種 子 町
16	その た ひろ み 園 田 広 海	男	鹿児島県立種子島中央高等学校	3	南 種 子 町

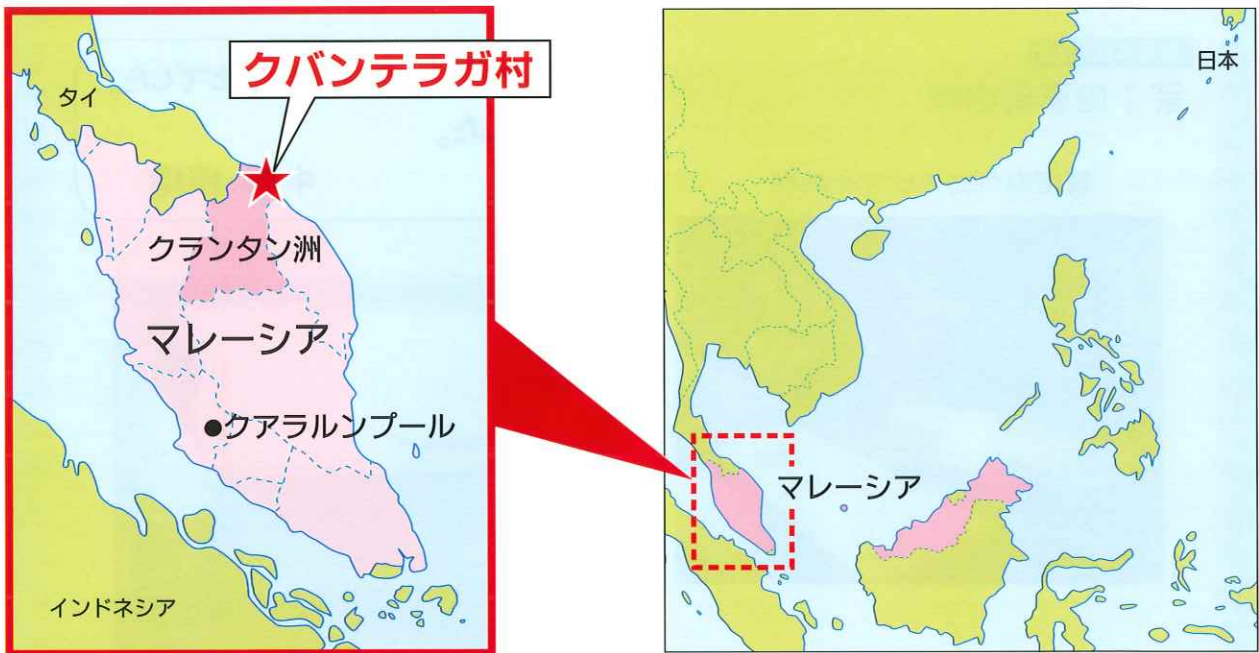
■ 同行者

	名 前	性別	備 考
1	ゆみ ば あき のぶ 弓 場 秋 信	男	鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長
2	たけ うち ふみ のり 竹 内 文 紀	男	財団法人鹿児島県国際交流協会 総務企画課長
3	やま した み ほ穂 山 下 美 穂	女	青年海外協力隊ベトナムOG (助産師) 鹿児島純心女子大学看護栄養学部講師
4	なが やま ま り理 永 山 麻 理	女	青年海外協力隊ラオスOG
5	やま しる ゆう じ司 山 城 裕 司	男	南日本新聞編集局社会部 記者
6	まつ ざき ま き紀 松 崎 真 紀	女	鹿児島テレビ報道局報道部 記者

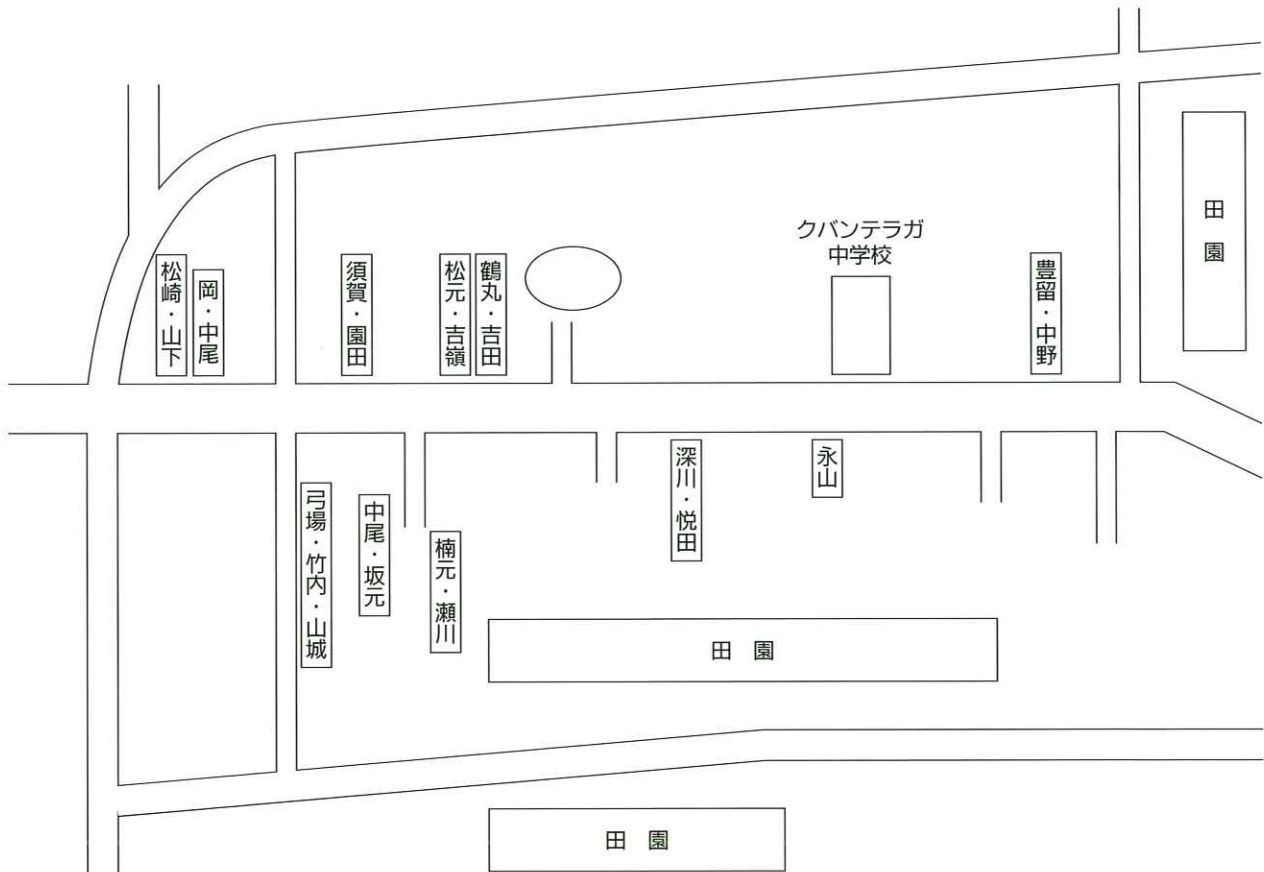
スケジュール

月日	曜	地名	時刻	交通機関	内容	宿泊
7月24日	日	鹿児島空港 ソウル（仁川空港） ソウル（仁川空港） クアラルンプール空港	9:00 12:10発 13:45着 16:35発 22:00着	KE786 KE671	集合・チェックイン・結団式 ホテルへ移動	クアラルンプール ホテル
7月25日	月	クアラルンプール クアラルンプール空港 コタバル空港	10:00-11:00 15:10発 16:05着	バス MH1396 バス	午前：JICAマレーシア事務所 表敬 空港へ移動 午後：昼食+コタバルへ移動 クバンテラガ村・ホームステイ先へ移動 歓迎会	クバンテラガ ホームステイ
7月26日	火	ホームステイ先	9:00-11:00 11:00 14:00 20:00	バス	午前：青年海外協力隊員活動視察 PDK訪問（障害者センター） PDK：～地域に根差したリハビリテーション～ 隊員：高山 葵 （ソーシャルワーカー、クランタン州、コタバル） 隊員：捧 文子 （作業療法士、クランタン州、コタバル） 隊員：藤原 講平 （体育、クランタン州、コタバル） 午後：ホームステイ先で過ごす 現地学生との文化交流会	ホームステイ
7月27日	水	ホームステイ先	8:30 20:00	バス	午前：青年海外協力隊員活動視察 チェト中学校 隊員：奥村 由夏 （養護、クランタン州、パシルマス） 午後：太平洋戦争痕跡視察	ホームステイ
7月28日	木	ホームステイ先		バス	終日ホストファミリーと過ごす 農業体験 夜：お別れ会	ホームステイ
7月29日	金	ホームステイ先 コタバル クアラルンプール	16:45発 17:45着	バス MH1397	午前：コタバルショッピングセンター 空港へ移動 午後：クアラルンプールへ移動 ホテルへ移動	クアラルンプール ホテル
7月30日	土	クアラルンプール市内 クアラルンプール	午前 午後 23:25発	バス バス KE672	クアラルンプール市内観光 クアラルンプール郊外観光	機内泊
7月31日	日	ソウル（仁川空港） ソウル（仁川空港） 鹿児島空港	7:05着 9:30発 11:00着	KE785	解団式（国際線ロビー）	

地図



クバンテラガ村 (ホームステイ先)



体験事業総集編

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

6月4日(土)

第1回事前研修

国際協力についての勉強



この日は団員の初顔合わせでした。
緊張しました。

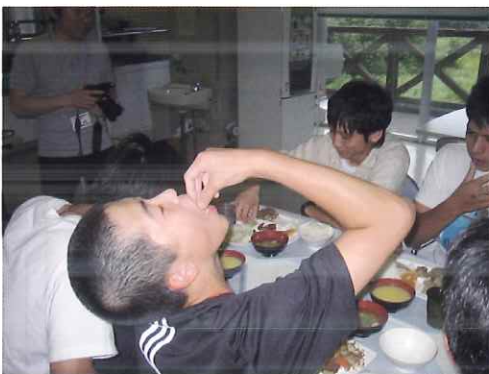
中野 梅緒



7月2日(土)～3日(日)

第2回事前研修

手で食べる練習



出し物の練習



語学研修 (マレーシア語)



2日目はマレー語の練習の
成果もあり、自己紹介まで
出来るようになりました。

松元 春香

7月24日(日)

結団式・出発



鹿児島空港国際線ターミナル



マレーシアに行って
少しでも多くのことを学び
成長して帰ってきて、
将来に活かしていきたいです。

悦田 愛



韓国・仁川国際空港



マレーシア クアラルンプール空港到着

マレーシアは、
他民族が生活できるように
様々な店が並んでいて、
ひとつひとつに個性を感じた。

園田 広海

7月25日(月)

JICAマレーシア事務所 表敬



コタバル空港到着



JICAマレーシア事務所では、
なんとかしなきゃという気持ちと
違う世界を理解する気持ちが
大々なんだということを教わりました。

深川 桃花

ホームステイ先クバンテラガ村



歓迎会



対面式

7月26日(火)

青年海外協力隊活動視察 PDK (障害者センター) 訪問

藤原講平隊員：体育



捧文子隊員：作業療法士



高山葵隊員：ソーシャルワーカー



現地中学生との文化交流

独特な衣装の踊りや歌を見て、
改めて文化の違いを感じました。

吉嶺 彩夏



7月27日(水)

青年海外協力隊員活動視察
Chetok 中学校

奥村 由夏 隊員



全校生徒からの盛大な歓迎を受け、
マレーシアの人々温かい心を感じました。

楠元 崇礼



戦争跡地視察



真珠湾攻撃の数時間前に
日本軍がマレーシアへ上陸しており、
その跡地と博物館に行きました。

須賀 雄平



7月28日(木)

ホストファミリーと過ごす・農業体験



お味噌汁とちらし寿司を作りました。

ホストファミリーの料理を
日本でも挑戦してみたいです。
岡 祐里



仏教
イスラム教の違い、
衣食住の
違いを見ました。
豊留 春菜



7月28日(木)夕方~7月29日(土)朝

お別れ会・村々のお別れ



4日間の
ホームステイは
大変貴重な体験と
なりました。

中屋 諒大



マレーシアで過ごした日々は
一生忘れません。

坂元 智樹



7月30日(土)

クアラ Lumpur 市内観光

ツインタワーは、
近くで見ると
やはりとても大きくて、
さすが世界一という
感じてました。

吉田 侑可



クアラ Lumpur 郊外観光

バツ洞窟の中の
272段の階段を
上った!
洞窟の中は空が
セリ取られてるようで
キレイだった。

鶴丸 木綿花



階段が長く
とても急だったので
落ちそうで
怖かったです。

中尾 聖



7月31日(日)

解団式



青年海外協力隊
として活躍したい
という意志が
更に強くなりました。

瀬川 明



8月3日(水)

表敬訪問



支援して下さいました、
そして企業を
表敬訪問しました。
本当に
ありがとうございました。

団員一同

8月27日(土)

報告会



第1回参加者 松崎勝利さん

マレーシアへ行って

吉田南中学校 2年 中尾 聖

私は、初めてマレーシアという日本以外の国に行ってみて、日本とマレーシアについて考えてみました。今までは、ずっと日本にいたから、いつもの生活が当たり前だと思っていたけど、今回日本の凄さや、文化の違いに気づきました。

日本では、箸やフォーク、スプーンで食べるのが普通だけど、マレーシアではご飯を右手で食べます。そして、テーブルではなく地べたに置くのが普通でした。私はスナック菓子を食べる時は手で食べるけど、特に右手で食べないといけないというわけでなくいつも考えずに食べているからマレーシアの食事に慣れるのが大変でした。

日本ではお店に行っても普通にトイレに入れて、トイレトペーパーも備え付けられているけど、マレーシアだとお金を払わないといけないかったり便座をきれいに拭かないと座れないくらい汚れていて使いづらいと思いました。

また、日本とマレーシアでは宗教が全然違って、日本だといろいろな宗教の人がいて、必ずしなくてはいけないというわけでなく、自由にできているけど、マレーシアでは、「マレー系の人にはイスラム教を信仰する」というのが憲法に載ってて決まりごとが多いと思いました。特に女の人は肌を見せてはいけない、断食がある、豚肉やアルコール、マーガリンは食べてはいけないなどの食事制限があってそれらを守っているのがすごいと思いま

した。

日本とマレーシアは、違うことばかりでなく、主食がお米だったり日本人と話すように同世代の子とテレビの話や今はまっていること、恋愛の話などもしました。言葉が違って、たくさん話すことができたので良かったです。

私は、異文化で言葉も違うし、当たり前だと思っていたことがそうでなかったりした中で、マレーシアに滞在する日は少なかったけど、良いところをたくさん見つけることができました。また、日本にはわからなかったけど、外国へ行って見たことで日本の良さも分かりました。

マレーシアの良いところは、多民族でさまざまな人がいる中でお互いに協力し合って、生活していたところです。一家族の人数が多く、地域のかかわりがすごく深いと思いました。みんなが他人のことを思いやっていると、良い仲はできないと思うから、私も人のかかわりを大切にしようと思いました。

日本の良いところは、衛生面がしっかり管理されていて、住みやすいところです。今までは、それが普通だと思っていたけど、日本のようにはできない国があることを知って、私達は恵まれているんだなと思いました。

日本を出て、外国へ行ったからこそ気づくことや初めて知ることができ、いろいろな体験を通して経験につながったと思うので良かったです。



本人：後列左



本人：右から2番目

マレーシア

長田中学校 3年 坂元 智樹

この体験事業に参加したことで、今まで空想の中であつた途上国の現状、青年海外協力隊の活動が直に分かった。

最初マレーシアの首都クアラルンプールに着いた時、高い建物が並んでいてとても驚いた。しかし、それは一部だけだった。あとはもう高くても3・4階ぐらいしかなかった。

また、首都のホテルに泊まった時、たくさん衝撃的な事連発だった。例えば、トイレの水は流れないとか、お風呂の中がとても汚くて髪の毛が落ちていたりとかびっくりでした。初日からこうだと、マレーシアの首都以外の生活はどれだけすごいことになっているのだろうかと、とても不安でいっぱいになってしまいました。



本人：前列右から4番目

そして、2日目からは首都クアラルンプールから飛行機で1時間、コタバルという町に行きました。その町は昔、日本軍がマレーシアに初めて上陸したところでもありました。

その町には、その時、青年海外協力隊員が4人もいました。4人とも障害者の方がいらっしゃる所にいました。一人は、中学校の中にある特別学級、あとの3人は年齢制限のない施設にいました。

僕はそれぞれの施設、学校に行きました。最初は施設に行きました。その施設では着いた途端に授業が始まりました。最初は体操という訳で、日本でおなじみラジオ体操が行われました。日本の先生がリードして生徒のみなさんも、足を屈伸させたり、腕を回しながら大きく運動をしていました。次に、日本の国旗が入ったうちわを作りました。みんな一生懸命、先生の作った手本を見ながら作っていました。そんな中、日本の先生達はあま

り生徒さん達と話さず、マレーシアの方の先生3人ばかりが生徒に話しかけていました。そのことを後で聞くと、「私達は生徒を教育するために、ここに来たのではなくて、生徒をどういうふうに教育すればいいのか先生を教育するために来たからです。」と答えてくれました。

もう一つの特別学級では、授業内容は違いましたが、同じようなことを言っていました。また、最後に「私達は2年という期限付きでここに来ているので、1日1日がとても大切。多くの方がしっかりと教育というものを受けられるようにがんばっているだけです。」とこう語っていました。一人一人が日本以外の国のために、一生懸命に目標をもって日々がんばる。これが青年海外協力隊の人たちが持っている志なのだなと思いました。僕はとても尊敬しました。

また、2日目からはマレーシアの人が住んでいる家にホームステイをしました。初日があれだったので覚悟していましたが、そこまでなく住みやすかったです。ベッドには蚊帳があり、夜は虫がこなくてとても良かったです。そして、家の近くには広場があり、そこでサッカーをするために毎日村の子ども達がきました。僕もその中に入れてもらい、村の子ども達とサッカーをしました。僕達はサッカーをする時、靴を履いていましたがマレーシアの子ども達はみんな素足でした。また、マレーシアの子ども達は毎日やっているからか、みんなとても上手でした。

しかし、そんなサッカーも夕方になるとスコールがきて終わってしまいます。マレーシアは本当にさっきまで雲一つなく晴れていたのに急に雨が降ってくることがありました。その雨もかなりのどしゃ降り、と思っただけでまた晴れてしまうという日本にはない気象が有りました。また、マレーシアは日本より湿気がなく涼しかったです。

このように、マレーシアにはもっといいところがまだまだあります。最後に、僕が言いたいことは、マレーシアの人々はとても大きな絆をもっていました。それは、少なくとも日本よりもすごく大きい絆です。これは行ってみたら分かります。最後になりますが、事業に関わった皆様ありがとうございました。



本人：右

ホームステイから学ぶ 異文化理解

鹿児島玉龍高等学校 2年 吉田 侑可

7月24日、私たち団員は日本を発ち、マレーシアへと向かった。私にとっては、今回が初の「海外」であり、もちろんホームステイをするのも初めてだったので、どのようなところなのか、どんな人たちがいるのかなど、期待と不安に胸をふくらませていた。

マレーシア2日目。この日は、ホームステイをする村へ移動し、それぞれのホストファミリーと対面することになっていただけあって、とても楽しみにしていた日の1つでもあった。ホームステイをした村は、首都であるクアラルンプールとは違い、野生の牛が多くいるようなとてもどかなところだった。

村の学校へ到着し、思っていたよりもはるかに盛大な歓迎を受け、いよいよホストファミリーとの対面式。私のホストファミリーはお母さんと娘さんの2人家族だった。一通り対面式が終わり、軽く挨拶を済ませた後、ついに4日間お世話になるホストファミリーの家へと向かった。



ホームステイ先では、全てにおいて日本とは異なり驚きの連続だった。手を使って食事をするのももちろんのこと、お風呂はお湯が出ないために「水浴び」であることや、トイレは水洗ではないことなど、普段の日本の生活からは考えられないようなことばかりだった。もちろ

ん、最初は水浴びをすることにも、水洗ではないトイレを使うのにも、手で食事をするのにも抵抗はあった。しかし、ホストファミリーと時間を共有するようになるにつれて、徐々に抵抗が薄れていった。そして、それと同時に「せっかくマレーシアに来たのだから、日本にいるときと同じように生活するのではなく、マレーシアの人たちと同じ生活をするべきだ」とも思うようになった。そう考えるようになるうちに、それまで受け入れられずに拒否していたものに少しずつチャレンジすることができるようになったのだ。



本人：右

ホームステイ最終日の夜、私はホストファミリーにも日本の文化を少しでも知ってもらおうと、日本料理を作って食べてもらうことにした。作ったのは、ちらし寿司と味噌汁。

マレーシアの料理は、辛いかわいかなの両極端だったので、受け入れられるかとても不安だった。テーブルに並べると、恐る恐るちらし寿司を口に運ぶホストファミリー。もし、おいしくないと言われたらどうしよう、と考えていたが、笑顔で「スダツ（おいしい）」と言われ、少しだけ日本のことを受け入れてもらえた気がした。

マレーシアには、日本とは違った習慣などが多くあった。最初はなかなか受け入れることのできないものもあったが、ホームステイをしていくうちに、だんだんと受け入れることができるようになっていった。私は今回、この事業でのホームステイを通して、これまでよりも異文化理解についてわかることができたと思った。

マレーシアの温かさ

鹿屋女子高等学校 2年 鶴丸 木綿花

私がマレーシアでの一週間で、一番心に残ったことは何かと聞かれたら、迷わずホストファミリーの家で開かれたパーティーだと答える。あんなに笑い、笑われ、よく食べ、よく喋り、色々な人と出会った、今思い出しても自然と笑顔になってしまう素敵な日は、これまでになかったし、きっとこれから先もないのではないかなと思うからだ。

ホームステイ最終日のその日の朝、隣の家で、女の子が作業をしているのが見えた。何にでも興味を持っていた私は、ためらうことなくそこに入った。その薄暗い土間では、数人がおしゃべりを楽しみながら料理の準備をしていた。何があるのかと聞いて初めて、パーティーがあるのだと知った。支度がととのうと、野外パーティーが始まった。といっても時間は決まっておらず、色々な人が自由に出入りしていた。変わらないのは、新しく人が来ると、私をすでに知っている人が、その人に私の話をすること。会話に“Jepun (日本)”という単語が混ざるのに気づいて振り向くと、“ユウカ, Selamat petang”と言われ、「挨拶をして」と促される。私はその通りに挨拶をして、年齢を聞かれたり、“Makan-makan (食べて)”と言われたりする。そうして皆と知り合いになり、その日そこにいた全ての人と会話をし、たくさんの思い出を作った。

お米の麺を食べるとき、手で食べるのに慣れない私には持つのも口に入れるのも難しかった。それを見た人々に大爆笑され、教えてもらいながら食べたこと。近所のおじさんと数を一緒に数えて盛り上がったこと。隣の子も達が珍しそうに会話帳をめくっていたこと。箸の使い方を教えたこと。ちらし寿司を食べさせたら微妙な顔をされたこと。こげ茶色の粉を固めたようなものを指して“Ini apa? (これ何?)”と聞いたとき、ニヤ

ニヤ笑いながら食べて、というジェスチャーをされ、食べてみてあまりのしょっぱさに言葉も出ない私に、眺めていた人たちから大爆笑が起こったこと。涙目の私にジュースを渡してくれながらも皆大笑いしていたこと。一つ一つ大切な宝物だ。その証拠に、笑われていても、私はずっと気分が良かった。笑われることで、一緒に笑うことで、受け入れられていると感じられたからだ。そして、満ち足りていたからだ。

夕方、何のパーティーなのかを聞かなかったことに気づいた私に当然のように返ってきた答えは“あなたたちのパーティーだよ”という言葉。私はそのマレーシア語の意味が分かったとき、涙がでるのを我慢した。準備の大変さを思うと余計に泣きそうだった。“Terima kasih”それ以上の言葉で感謝を伝えられない自分がもどかしかった。でもそのとき、温かい心に触れて。純粋に、心から、マレーシアに来ることができて良かったと思った。そして、絶対に今日を忘れないでいようと誓った。

あれは、私に人の温かみを教えてくれたパーティーだった。

マレーシアに行く前、マレーシアという言葉で私が連想していたのは風景だった。農村。住み心地のよさそうな家。木。畑。そんな風景を心で描いていた。しかし、今は違う。私が連想するのは、人の顔だ。ibu (お母さん)、kakak (お姉さん)。隣の家のお父さんにお母さん、そして一緒に喋り、遊んだ子どもたち。おしゃべりした近所のおばさんたち。笑顔で私を迎えてくれた人たちの顔が浮かんでくる。マレーシアを思い出すと、笑顔しか思い浮かばない位、楽しいことばかりだったのにせつないような気分になって涙が出そうになる。それは日本人の私を快く、自然に受け入れてくれ、生活や会話を一緒に楽しもうとしてくれたあの人たちの温かさが私に伝わり、そうさせるのだ。私に温かみを教えてくれた人たちに、違う世界を覗かせてくれた人たちに、私の感謝も日本から伝わっていればいい。

Semua, terimakasih. Jumpa lagi!!



ホストファミリー



本人：前列左から3番目

新しい友達

国分中央高等学校 1年 松元 春香

私は、7月24日から7月31日までマレーシアに行ってきました。の中で一番心に残ったのはホームステイです。7月25日から7月29日と短い間でしたが、たくさんの思い出ができました。

私たちは、コタバルの空港からクバンテラガ村へ向かいました。私は村に到着するまで仲良くできるだろうか、言葉はうまく伝わるだろうか、食べ物はどういう味なんだろうという不安や何か日本では見られない珍しい物はあるのかな。という期待でいっぱいでした。それでもまだ少しだけ不安のほうが大きかったので、すごく緊張していました。村に到着するとたくさんの村の人が歓迎してくれました。想像していた何倍もの歓迎を受け、私の不安はすぐに消えてしまいました。残ったのは、どんな家族と一緒に生活できるのかな？などの期待だけでした。

そして、私の待ちに待った対面式が始まりました。私は、名前を呼ばれたので前へ出ました。そしてホストマザーと握手し、ホストマザーに手を引かれ席につきました。

ドキドキの対面式も終わり、私たちはホストファミリーの家へ向かいました。

家に着くと、自己紹介をしました。私たちの後にホストファミリーの自己紹介もしてもらいました。私と同級生のアイナ、8つ年上のアゼェア。私たちはマレー語でお姉さんという意味のあるカカと呼びました。そしてお母さんがウミー、お父さんがアヤー。全員の呼び方を覚えめました。その夜は、写真を見せてもらったりしました。友達やいとこ、兄弟などを紹介してくれました。初めて会ったのに、すぐ仲良くなることができました。

次の日は、文化交流でした。マレーシアの伝統的な踊りや歌を見せてもらいました。

文化交流も終わり家へ帰りました。私たちは歳が近い事もあり、すごく話があいました。その夜も十二時くらいまで楽しく話していました。そんな楽しい日々を過ごすうちに、だんだんと別れの時が近づいてきました。

別れの日の前の夜は、「明日でお別れだね。」などの話をしていました。そんな話をしているとすごくさみしくなってきました。

話題も楽しいものになり楽しくすごしていると時間が過ぎるのは、とても早く、気づくと夜中でした。そして、次の朝。とうとう別れがやってきてしまいました。

私は、こんなにも帰りたくない、離れたくないと思っ

たのは初めてでした。

せっかくできた新しい友達と離れるのは、すごく嫌でした。

「また来るね」と約束し、村を離れました。マレーシアではたくさんの事を経験しましたが、私はこれが一番の思い出です。こんな最高の思い出が作れたのも、両親、引率の方々、支援してくださった方々のおかげだと思い、心から感謝しています。この体験で私の夢は、「世界中のいろんな人の役に立つ仕事をしたい。」ということに決まりました。

今後も、その夢に向けて、がんばっていこうと思います。



本人：右から2番目



マレーシアに行って

桜山中学校 3年 吉嶺 彩夏

わたしは、今回この鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加し、団員の一人としてマレーシアに行きました。

2度の事前研修で、宗教とのつながりや現在途上国であることなど、マレーシアについてたくさんを知りました。マレーシアは多民族国家で、マレー系の人や中華系の人、インド系の人といったたくさんの人が一つの国で暮らしています。でもやはり、大半がマレー系の人です。マレーシアでは、マレー系の人にはイスラム教を信仰しなければならない、と憲法で定められています。これは、宗教のことであまり決まりのない日本に住むわたしにとって、とても衝撃的でした。イスラム教はいろいろな面で少し制限があります。中でも一番驚いたのは、男女間の制限についてです。もし、付き合っている方がいても、結婚するまでは手をつなぐことさえできないそうです。事前研修で少し勉強していたので知ってはいましたが、実際にマレーシアに行って、マレーシアの方の宗教に対する考え方はとてもすごいなあと感じました。

マレーシアでわたしたちは、JICA事務所の訪問や青年海外協力隊の活動視察などをし、隊員の方から話を聞くこともできました。たくさん話を聞き、また、たくさんの方に感謝されていることを知り、わたしも将来は途上国に何らかの支援ができるような大人になりたいと思いました。

マレーシアで過ごす約一週間の後半は、クランタン州のコタバルにあるクバンテラガ村でホームステイをしました。ホームステイ先の家族の皆さんが、快くわたしたちのことを受け入れてくださり、4泊5日のホームステイを楽しく、充実したものにすることができました。ホームステイ先では、当然初めてのことばかりでした。マレーシアは、日本のようなお風呂ではなく、極端にいえばただの水浴びです。初めは慣れなくて、何度も寒いなあと思いました。しかし慣れてくると、マレーシアは少し気温の高い国ということもあり、水であることが普通に見えるようになりました。また、食事の面では、どれも初めて口にするものばかりでした。わたしが驚いたのは、マレーシアの料理は「甘い」と「辛い」が両極端であるということです。でも、おいしいものが多かったです。

わたしは、この事業に参加して、たくさんのことを体験し、たくさんのことを学び、たくさんの人と出会うことができました。このひとつひとつを大事にして、学んだことはこれからしっかり生かしていきたいです。



本人：左から3番目



本人：前から2列目左

マレーシアで感じ、 そして今考えること

立神中学校 1年 深川 桃花

マレーシアや人々が好きになったのはもちろん、より一層、日本のことが好きになった。

最初にJICAマレーシア事務所を訪問し、援助の理由やJICAの活動について教えていただいた。活動は主に、技術協力と有償資金協力和ボランティア協力の3つがあり、場所や人々にあった援助や、人々が求めている援助をしているようだ。

JICAマレーシア事務所では、なんとかしようという気持ちと、違う世界を理解する気持ちが大切なんだということを知った。

ホームステイ先では、美味しいランブータンや手ごわいドリアン、水浴びなどたくさんの体験が待っていた。

どこまでが庭なのかどこからが森なのかわからないくらい木々が多く茂っていた広い庭。日本の庭のイメージとは全然違うものだった。そこでたくさんの動物を飼っていた。一番驚いたのがサル。そのほか、牛、ガチョウ、猫、にわとりなど10匹の生き物が庭でのびのびと飼われていた。



家の中に虫がたくさんいたことに驚いたが、その虫を食べるヤモリがいるのにも驚いた。鳥のような鳴き声も聞いた。驚いたこともあったが、ホストファミリーの方が優しくしてくれたおかげで、ステイ先ではリラックスして過ごせた。

今回、特に印象に残ったのは、ペトロナスツインタワーだ。日本など先進国の協力をもらいながら建設されたその世界一のツインタワーは、ジャングルのような木がたくさん生えた緑豊かな中にそびえ立つ。豊かな自然と近代的な建物が一緒に見られる少し不思議な光景に最初違和感を感じたが、すごいことだと思い直した。

私が小さい頃住んでいた上海や東京、大阪などは、すでにビルで街が埋め尽くされていて緑が少ない。しかし、ここは違った。低い建物をたくさん建築すれば、たくさんの土地が必要になり、それだけ、森の木を伐採しないとけなくなる。高層ビルの場合だと、一軒家と同じ土地を使っても延べ床面積はビルの方が多いため土地を有効利用できる。大自然の中の超高層ビルは、今ある豊かな自然をできるだけ壊さないで都市を作ることができる。豊かな緑は未来のために、地球温暖化ストップのためにもできるだけ残して欲しい。



本人：前列右から2番目

今私は、感謝の気持ちでいっぱいだ。特別支援学級で活動を視察したチェト中学校では、伝統楽器演奏や獅子舞など素晴らしい歓迎を受けた。そのプログラムに書いていた言葉。

「ここに来てくださった全ての方々は何千もの感謝の気持ちを伝えます。Terima kasih.」

今まで私が色々な人に普段伝えていた「感謝」とは何か違うずっりとした「心」を感じた。この言葉で少し私が変わったように思った。

この経験を自分の将来のためだけではなく、周りの人々や日本の未来のために役立てることができるよう努力したい。マレーシアと今回の研修を支えてくださった全てのみなさんに感謝とありがとうを伝えたい。

Terima kasih.

マレーシアで感じたこと

加世田高等学校 3年 瀬川 明

クアラルンプール国際空港に到着し、構内を見渡した瞬間、多民族国家マレーシアを実感した。構内には様々な人種や民族の人々で溢れていたからである。母親が外国人というある程度特殊な環境で育った僕はある疑問を抱いた。それは、「異なる文化、宗教、生活習慣をもつ民族が一つの国の中でうまくやっていくことは可能だろうか？」ということだ。

家庭という小さな共同体の中でさえ、異なる文化や生活習慣をもつ同士が共に生活することの難しさを実感しているのに、まして国家という巨大な組織の中で、複数の民族が何の問題もなく共存することなんてできるわけがないと思ったのである。調べてみると、世界的にみると規模は小さいが、民族間での多少のいざこざが存在することがわかった。ではどうすれば民族間で問題のない関係を築いていけるのだろうか？この問題は個人的にも解決したいものだったので、1週間の研修の中で答えを見つけ出したいと思った。

2日目からはクランタン州にある農村、クバンテラガ村に4日間のホームステイである。マレー人は基本的にイスラム教を信仰しており、宗教が生活に根強く浸透している。日本では普段の生活で宗教をあまり意識しない生活を送っていたため、日に5回の礼拝や厳しい食べ物の禁忌を守る姿にカルチャーショックを受けてしまった。しかしホームステイ先の家族と一緒にご飯を手で食べ、風呂の代わりに水浴びをしたりするなど、寝食を共にしながら生活するうちに、最初はイスラム教信者を閉鎖的で過激なものだという間違ったイメージを抱いていた自分を恥じるようになった。彼等は厳しい制約のある生活を送るなかで家族との絆を深め穏やかに過ごす素晴らしい人たちだったのだ。また、日本にいるだけでは気づかない日本の良い面を知ることが出来た。礼儀正しさ、整備されたインフラ、衛生面などである。発展途上国の田舎町にさえも、日本の大手メーカーの看板がある事実。日本は自分の思っていた以上に進んでいるんだなと思うと同時に、自分は一介の学生であるのに誇らしく思えた。

3日目、青年海外協力隊の隊員が活動する現場の一つであるPDK施設を訪問した。ソーシャルワーカー、作業療法士、体育の協力隊員として活動する隊員はPDK施設に通う障害をもつ方々に対する教育や、施設職員に対する指導など多岐にわたる活動を現地の方々と共に進めていた。自分たちも、実際にその施設で行われる活動である体操や工作などをその施設に通う生徒と一緒にしな

がら、隊員の活動を楽しみ雰囲気なか体験した。話によると、協力隊による協力はただ知識や技術を伝えるだけではいけないということだ。現地では何が求められているか、そこで自分は何ができるかを工夫しながら自分なりの協力をしなくてはならないのだ。そうすることによって2年間の活動を終え、隊員が去ってからも活かされるのである。

そういった生の国際協力の現場を肌で感じる事が出来て、以前よりあった青年海外協力隊参加への思いをさらに強めることができた。異なる文化や宗教、生活習慣をもつ民族が共に暮らすためには、相手を「知る」こと、そして「理解」することが大事だと思う。相手のことを知らなければ自分のように間違った認識をもち続けたり、誤解を生み争いに発展するかもしれない。また相手を知らなければ、正しい国際協力はできないのである。これはマレーシアに来て最初に感じた疑問の答えとなるだろう。

1週間という短い間だったが、得るものは多かった。この研修で得た貴重な経験を無駄にしないように、これからの人生に生かしていきたい。



本人：左



本人：前列左から2番目

国際協力体験事業に 参加して

川辺高等学校 2年 楠元 崇孔

私は今回この事業に参加して、日本では体験できないようなことを多く体験することができました。

その中でも一番印象に残っているのが、現地で活動している青年海外協力隊の隊員の方の活動を視察したことです。それまで、青年海外協力隊という名前はきいたことはあったけれど、漠然としたイメージしかありませんでした。隊員の方の活動を自分の目で見るができるということとても楽しみにしていました。私たちが行ったのは、身体に障害を持っている現地の方たちの施設や学校でした。そこでは一緒に活動に参加したり、隊員の方に話を聞いたりすることができました。それらを通して感じたのは、隊員の方々はみな、自分の仕事にやりがいを感じていて、自分のできることを少しでも他の国の人たちに伝えたいという思いを持って活動しているということです。また、ただ単に自分の知識や技術を相手に押し付けるのではなく、現地の人と話し合い、そのうえで現地の人にとって最も良い方法を考えていくという隊員の方の話を聞いて、これが国際協力なのかなと感じました。

また、4泊5日のホームステイも体験することができました。言葉の通じない中で、ホストファミリーとコミュニケーションをとることができるのだろうか、慣れない環境で体調を崩さないだろうか、そんな不安でいっぱいでした。けれども、ホストファミリーの温かい受け入れのおかげで、不安だらけだったホームステイがとても楽しいものとなりました。初めは何を話していいのかも分からず、お互い黙ったままでしたが、時間がたつにつれ、片言のマレーシア語や身振り手振りを使って思っていることを伝えることができました。お互いの言葉を教えあったり、日本のことについて話をしたりと、コミュニケーションをとることができました。言葉の壁はあっても、伝えたいという気持ちを持っていれば思いは伝わるものだと感じました。

そして、ホームステイ先がマレー系の家庭でイスラム教の家庭だったので、右手だけを使って食事もしました。こぼしてしまうこともありましたが、見様見真似で食事をすることができました。食事はとてもおいしく、つい



本人：前列左



本人：前列右から4番目

つい食べ過ぎてしまうことも多くありました。慣れない言葉・文化の中でしたが、楽しい5日間を過ごすことができました。

マレーシアでの異文化に触れ、貴重な体験ができたこの1週間は私にとって、とても充実したものでした。自分が気づいたこと感じたことを友人や家族にも伝え、少しでも多くの人に国際協力について知ってほしいと思います。そして、私は日本に帰って来てから海外のニュースを見る機会が多くなりました。私はまだ、将来どのようなことがしたいかが決まっていません。けれどもこの事業に参加して国際協力の大切さを感じ、世界の役に立てるようなことをしたいと考えるようになりました。そのためにも、視野を広く持ち自分のしなければいけないことを意識しながら、今後の生活を送っていきたいと思います。この事業に参加して本当によかったです。

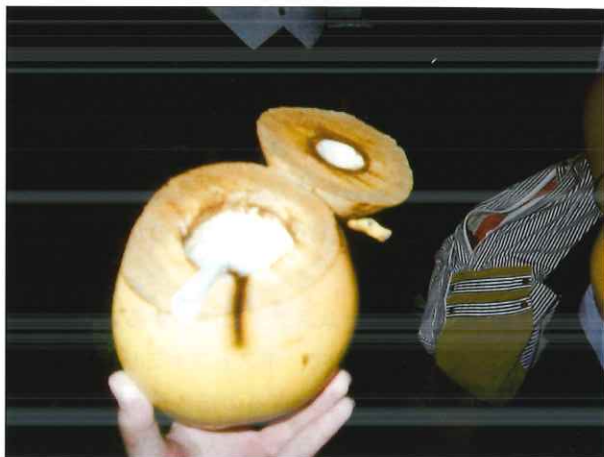
マレーシアに行って

鳳凰高等学校 1年 悦田 愛

私は、今回鹿児島県青少年国際協力体験事業の企画に参加して、マレーシアにホームステイすることができました。私は小さいころに見た発展途上国で活動する青年海外協力隊に隊員のテレビを見たことがあり、私も困っている人の役に立ちたいと子供のころから思っていました。それに私のクラスの副担任の先生が海外の色んなところに行ったことがある先生で、よく授業で話をしてくれて、私の知らないことがたくさんあり話を聞かされたとき、外国に興味を持っていました。そしてマレーシアにホームステイできることになり、海外でたくさんのことを学んで精神的に成長していきたいと思いました。マレーシアでの自己紹介や生活についての研修も終わり、そして出発の日になり、マレーシアに着きました。マレーシアは私が思っていた印象とはまったく違いました。私は、マレーシアとは発展途上国なので家は藁の家で車もほとんどなくて、道や道路には親のいない子供たちがたくさんいて、危ない国だと思っていました。でも私が思っていたのとは全然違って、マレーシアの家は立派な一軒家で、家もバイクもたくさん走っていて、子供達もしっかり学校に通っていて、危ない国とは程遠い国でした。でも、やはり発展途上国なのでまだまだ発展できてない所もありました。障害のある人たちが通う学校などは、まだ教師たちが生徒に教える内容が不十分で、青年海外協力隊の奥村隊員が教師たちに生活の自立の支援の仕方を教える活動をしていました。他にも福祉関係で活動している隊員がたくさんいました。ホストファミリーと一緒に生活をして、マレーシアの生活を直に体験することができました。マレーシアでの食事は甘い料理か辛い料理のほとんどでした。でもなれると、とてもおいしかったです。2日目くらいには、手で食べるのにも抵抗はなくなっていました。他にもマレーシアでのお風呂は、「マンディ」と言って、大きな水瓶に入った水を体にかける、いわゆる水浴びでした。結構冷たい水ですが、マレーシアの湿度が熱かったのでちょうどいい感じでした。言語もちょっとした英単語とマレーシア会話の本と、ジェスチャーと、笑顔で会話は十分に出来ました。相手に伝えようと思う気持ち次第で伝わるのだと学習しました。今回マレーシアに行き、青年海外協力隊の活動が見れて私も将来青年海外協力隊に参加して、小さい頃から思っていた、少しでも発展途上国の人々の役に立ちたいと改めて思いました。私の通っている学科は福祉に関する学科で、今私は介護福祉士を目指して勉強しているのです

が、今回の体験をして将来介護福祉士になって福祉関連で青年海外協力隊に参加しようと心に決めました。

こんな貴重な体験が出来たのは、私に海外について興味を持たせてくれた副担任の先生や海外に行かしてくれた親やホームステイを企画してくれた人たちがいてのホームステイです。今回の体験で、たくさんの事を学んで精神的に成長して帰ってこれたと思います。これからは、この体験を少しでもたくさんの人に知ってもらい、たくさんの方が海外に興味を持って、少しでも青年海外協力隊の事を知って参加したいと思ってくれる人が増えてくれるようにしていきたいと思っています。本当にありがとうございました。



ココナッツジュース



本人：左

マレーシア異文化交流に 参加して

市来中学校 1年 岡 祐里

私は、このマレーシア異文化交流で感じた事がらが3つあります。

まず、特に印象に残った一つ目は日本人とマレーシア人の心では、温度差があることに感じました。それは、当たり前なのかもしれないけどホームステイ先のお母さんがどこからか帰って来ても私たちが家に入るたびに「おかえり」と笑顔で言ってくれるのです。その笑顔が今でも忘れられません。ただのあいさつなのに私は自分のあいさつであんなに人を温かくすることはできないと思ったのです。また、扇風機をつける時でも「寒くない？大丈夫？」などととても気遣ってくれて常に周囲に目を向けて言葉や笑顔もそえて相手に伝えるお母さんの姿は本当に素晴らしいと思いました。ふとその時なぜか日本人は自分を含めて他人に対して心が温かい時と冷たい時があるように感じてしまいました。日本は自分だけが良ければいいというかたよった考えがとても強いように思えたのです。

私は自分の身近な人や大切な人には優しくふるまうが他人には少し距離をおいて接するような所があるように思えたのです。

悲しんでいる人には少しでも心が落ち着くように、努力した人には「頑張ったね」と励ましたり、優しくされたなら「ありがとう」とあたりまえのようなことを日本人は少し忘れてしまっているような気になりました。今すぐにでもできるこの当たり前の気持ちを言葉や態度で人間どうしの距離は関係なく、伝えていけるような人になろうと思いました。



本人：右

二つ目は青年海外協力隊の人たちの厚みを感じました。青年海外協力隊の方達はただ現地へ行って日本の技術を教えるだけでなく自分達(隊員)も加わり一緒に活動するのです。ある青年海外協力隊員の方が「子どもたちの笑顔を見ると誇りややりがいを感じる」とおっしゃっていました。いつか私もそんな誇りややりがいを感じれ仕事についたら幸せだと思ったのです。人の笑顔がやりがいになるなんて日本では物やお金が重視されていて笑顔や人の気持ちが置き去りにされていると思う時があるように隊員の方から出た笑顔がやる気になるってカッコイイと思いました。言葉こそその人間性に少し驚き、今まで自分の将来を考えてきた方向が少しかわったように思えました。

三つ目はジャイカの活動です。日本がマレーシアにとってもたくさんの援助をしている事を改めて知ることができました。日本がマレーシアに資源を依存しているかわりに日本からはジャイカの関係者の方々が技術を伝えたりお金の援助をしている事を知りました。そのお金の金額がとても多くて、技術をたくさん伝えている事に本当にびっくりしました。

日本と世界は色々な所で繋がっていると分かりました。自分も何か将来は世界とのつながりが持てるように狭い世界でなく大きな広い心と目で見て自分の道を開いていきたいです。

最後に、今回の貴重な体験をさせて下さった団長さんをはじめジャイカの職員の皆様、記者の方々、推薦をしてくださった校長先生、お父さん、お母さん、いつも励ましてくれる友人に感謝の気持ちを伝えます。この経験を決して無駄にならないようにこの体験を自分のスタートだと思って違う国の文化や宗教・習慣などに触れてどの国へ行っても悔いの残らないように大きな自分なれる毎日の生活を大切にしていきたいです。

本当にありがとうございました。

気づかされたこと

串木野西中学校 2年 中屋 諒大

青少年国際協力体験事業「マレーシアで異文化理解の第一歩！」のプリントを4月に配られ、僕はなにげなく「マレーシアへ行ってみたい。世界とはどんなものか見たい。今までの優柔不断な自分が変われるのではないか。」と思いこの体験事業に応募しました。

体験事業に参加することが決まり、僕の13歳夏の挑戦が始まりました。一次そして二次と事前研修が行われ、パスポートも届き、早くマレーシアに行きたいという思いが強くなりました。

しかし、出発の日が近づくにつれて不安な気持ちが自分の心の中にだんだん芽生えてきました。

そして、7月24日。出発の日が来ました。僕の心の中では参加する期待はなくなり、不安な気持ちが大きく、何を考えていいか解らない状態で日本を発ちました。

韓国経由で約半日、マレーシア・クアラルンプールに到着。翌日JICA事務所へ訪問後、空路コタバルへ移動、ホームステイ先に到着。そして、四泊五日のホストファミリーとの交流が始まりました。

最初は、どんなふうに対応していいのか解らず、緊張の連続でしたが、ホストファミリーの暖かい振る舞いで心も気持ちも軽くなりました。見知らぬ外国人家族の中でマレーシアの文化や生活が全く違うこともあり、戸惑うこともありました。そんな時に団員の先輩方に助けられ、仲間の大切さも感じました。

ホームステイ3日目。体調を崩したことがとても残念でしたが、国際交流を通して自分の弱い所や、足りない所を見直すことができました。この体験事業を終えて、「自分の心は、何かで変わるのではなく、自分で自分自身を変えなければならない」と感じました。

また、この青少年国際協力体験事業の体験の中で、世

界には、生活が豊かな国もあれば生活が苦しく、食料が不足していたり、お金がなくて学校にも行けない、水は遠くの井戸へ汲みに行かなければならないという現状におかれている国もあることに気づかされました。

「発展途上国は貧しい暮らしをしているのにもかかわらず、先進国は豊かな暮らしだけを望んでもいいのか。」

今回、この体験事業を体験して今まで全く知らなかった青年海外協力隊のことに興味が大きい持てました。僕も海外での仕事、出来れば青年海外協力隊での活躍をしたいと思いました。

今回は貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。



本人：左

マレーシアに行って

鹿児島純心女子高等学校 2年 中野 桜緒

「スダツ」

たった一言この言葉を使うだけでみんな笑顔になり、その場が盛り上がる。マレーシアの食卓はとてにぎやかだ。友人の家に行って食べたり、一族全員で食べたりする。マレーシア語で「おいしい」という意味の「スダツ」は、マレーシアでよく使った言葉だ。

初めて、ホストファミリーとしゃべったときは、マレーシア語が分からず、戸惑ってしまい、全く会話ができなかった。本当に、お互い苦笑いしかでてこなく、頭が真っ白になってしまった。しかし、下手でも自由に自分の気持ちを伝えることが大切だと思い、ジェスチャーや英語とマレーシア語の混ざった奇妙な言葉を使って、一生懸命伝えてみた。すると、ホストファミリーはうれしそうに笑って、そこからたくさん話しかけてくれた。もし私が理解できなかつたら、片見離さず持っていた私の旅の友である「マレーシア会話帳」から一緒に言葉を探してくれた。また、ホストファミリーからも、簡単な日本語を教えてくれと言われ、「ヤー=はい」「トゥリマカセ=ありがとう」と教えると、とても喜んでくれ、会話の中でも使ってくれた。他人と接していく上でコミュニケーションは大切だと改めて感じる瞬間であった。

また、村の方々との交流会のことを思い出すと、今でも幸せな気分になる。言葉が通じない中でも、村の方々はみんな私たちを大歓迎してくれ、日本についてとても興味を持ってくれた。マレーシアの伝統舞踊に参加したり、おはら節を村の方々と一緒に踊ったりした。そこにいるみんなが笑顔で、私も笑顔で、確かに心が通じ合ったときだった。



本人：中列左

このように、村の方々はとても気さくで、村が一つにまとまっており、まるで家族のような感じだった。他人の家に突然、勝手に上がってもいやな顔をせず、むしろ喜んで食事を用意していた。今まで何とも思っていなかったが、日本人は他人としきりを作って、保守的になっている部分があることに気づいた。私も少し離れた家の人の顔や名前は全く分からない。仲が悪くはないが、しきりははっきりある気がする。もし、日本で勝手に家に上がりこんだら、それこそ不法侵入罪で訴えられる。

また、人見知りの激しい私にとって、初対面の人と親しくなるには時間がかかる。気を使ってしまうのだ。けれども、村の方々はとてもオープンで全く気を使わず、この私でさえも、すぐに親しくなるほどだった。

言葉、習慣、文化が違う中で、たくさんの方々となら親しくなれ、こんなにも笑顔でいられたのは奇跡だと思う。きっとそれは、お互いを理解し、認め合い、尊重できたということなのだ。行く前のあの不安はなんだったのかと思うほど本当に生き生きした1週間だった。

そして、私自身にも気持ちの面でさまざまな変化が起こった。マレーシアにいったことで、日本を客観的に見ることができ、今まで気づけなかったさまざまなことを知れたり、親しい発見を見つけることができた。他国に行ってみることで、世界について教科書の文章だけでは分からない本当の姿を知ることができるのと同時に、自国についても本当の姿を知れるのだと思う。そして、世界はもちろん、自国にも魅力を感じることができる。グローバルな世の中の今日において、このようなことは大切だろう。

今回の体験は自分の自信につながり、これから自分自身を作っていくだろう。とにかく今は、世界中の人と交流したいという気持ちが体中からわきあがってくる。

「マレーシアのことをたくさん吸収し、いろんな方々との交流を楽しみたい」ありふれた目標を掲げたこの1週間、私はどんなに貴重な体験をすることができただろう。

時感

鹿児島松陽高等学校 3年 豊留 春菜

高校生という期間は、あっという間に過ぎ去っていきます。ついこないだ入学式をしたと思っていたのに、気が付けばもう受験、そして卒業というゴールへ向かっている自分がいました。高校生活は毎日慌しく、私がボーとしている間にどんどん周りや時がおいついて私を過ぎ去っていくような、気怠くやるせ無い劣等感に追われていました。このまま歳を重ねて、気が付いたら鏡の中にはしわしわの自分が映っているような気がして、若いうちにいるいるな世界を見ておこう、その焦りと好奇心から私は青少年国際協力体験事業への参加を決めました。

今回私たちがホームステイに訪れたのはマレーシアの中でも自然が多く残るクバンテラガ村という所でした。私が今住んでいる所も鹿児島島の田舎の方なので比較的緑が多いのですが、そののびやかなくらいの大自然がそこには待ち受けていました。

たくさんの緑、それに伴うたくさんの虫、虫、虫！家の窓はガラス張りではなく風通しがよいため、家中を自由行動するヤモリ達。ホームステイ先のお母さんが最初、家の木からランブータンを採って渡してくれた時、蟻まみれのランブータンを見て眩暈に見舞われたことを覚えています。朝、目を覚ますとベッドの両サイドに散らばった虫の死骸。昨日まで寝ていたクアラルンプールの綺麗なベッドとは大違いです。シャワーも当然のごとくお湯は出ず、クーラーではなく扇風機。日本が恋しくなるのも時間の問題だと思いました。

ですが、住めば都とはよく言ったものです。1日目を過ぎたころから私はこれらの状況がすっかり平気になっていました。その大きな理由はマレーシア人の暮らしぶりを間近で感じたこと。虫はいても気にせず、むしろ虫がいる、ということは自然が豊かな証拠。暑ければ水浴び。彼らの行動を観察していると、小さいことは気にせず、今を楽しんで生きているように感じられます。他にも、周辺にいる人たち誰でも皆呼んでパーティーを開いたり、見ず知らずの私たちにたくさんのごちそうをふるまって下さったり、聞き取れない言葉を何度も繰り返して教えてくれたり…。そこには時間に囚われないゆっくりにした空気が流れていました。

提出期限、満員電車、評定、視聴率…時間に伴う数字に左右されている、私を含む日本人の暮らしとは全く逆の空気。小さいことばかり気にして何かに追われるように慌しく過ぎていく毎日。日本人は何を急いでいるのだろう。ふっと私は心が軽くなるのを感じました。

ホームステイ最後の夕食は、ホームステイで初日から食べていた、いつものカレーでした。おばあちゃんが作るスパイシーなカレー。美味しくてべろりと食べちゃうといつも、もっと食べる食べるとおかわりをついでくれたのはいい思い出です。マレーシア人は沢山のご飯を好きな時に食べます。下手すると3時のおやつでもカレーをガッツリ食べたりします。今やすっかりダイエットブームの日本人からしたら考えられないようなことだと思いますが、マレーシアの人たちはきっと、太っているのもご飯が美味しいのと、それを一緒に食べる家族がいて幸せな証拠だと言うのでしょうか。

マレーシアは地域によって、日本からは考えつかないような不自由・不便の中で暮らしている実態があります。ですが、日本からは考えつかないぐらいの友人、隣人、そして家族への何倍も大きい愛があり、助け合いの中でのんびりとした時をゆっくり生きています。日本人には、立ち止まってゆっくりひと休みするような時間の過ごし方も大事なのではないかと思います。私自身も周りとの競争よりも自分自身で成長することに時間を忘れよう、そういう風に思えたことがこの体験の何よりの収穫でした。今度はこの話を周りの知人へと語り、少しでも多く肩の荷を下ろしてあげることが私の活動だと考えています。マレーシアに行って帰ってきて終わりなのではなく語り継いでいくことが真の国際協力の第一歩なのです。



本人：左から2番目

マレーシアでの 研修を通して

種子島中央高等学校 3年 須賀 雄平

この7泊8日の研修は非常に密度が高く、あっという間に過ぎた。また、青年海外協力隊の活動の視察や村でのホームステイ、地元の中高生との交流など貴重な体験をたくさんし、国際協力の現状や異文化理解の大変さや重要さを肌で感じる事が出来た。

研修のうち4泊はホームステイで、僕達が普段送っている生活とは異なる日常生活を体験した。マレーシアと日本の生活様式には様々な違いがあるが、その中で特に印象深かったのが「宗教に対する考え方の違い」だ。日本人は宗教に対して寛容な人が多いが、マレーシア人の場合はそうではなかった。信仰する宗教によって生活様式もまるで違うのだ。ホストファミリーはイスラム教徒だったが、一日に5回のお祈り、豚肉やアルコールをとってはいけないことが宗教によって決まっていた。文化の違いに戸惑うこともあったが、ホストファミリーも優しく、ご飯もおいしくて毎日が楽しかった。言葉も通じず身振り手振りだったが、ホームステイを通じて「異文化理解には自分から知るう・やってみようという意欲が大切」だということを感じた。

青年海外協力隊の活動を視察する機会が何度かあり、国際協力の現場を自分の目で見る事が出来た。日本国内に籠ってはい決して出来ない貴重な体験だ。その視察の中で特に印象に残っていることがある。それは障害者支援をしている方の活動の視察で中学校に行ったときに見たスライドショーだ。その中で、隊員の方に対する感謝の言葉が何度も述べられていたのだ。それを見て、国際協力というのは協力する側の自己満足で一方向的に良いことをしている気になるのではない、ということを感じた。現地で求められていることを一緒に作り上げることが大切なのだ。そのためには現地の人たちと共に生活し、コミュニケーションを通して必要なことを考えなければならないが、それはとても大変なことだと思う。しかし隊員の方たちはその様子も見えず、生き生きとしていた。

この研修を終えて僕は、「自分も将来国際協力に携わりたい」という思いが強まった。青年海外協力隊には様々な職種で参加することが出来る。また、国際協力に貢献

するには青年海外協力隊に限らず色々な方法がある。自分に何が出来るのか考えていくために、まず知っていくことから始めたいと思う。自分に出来ることだけでなく、発展途上の国々がどのような状況か、何をすべきかも知らなければ国際協力は出来ない。そのためにこれから少しでも多くのことを吸収したいのだ。そして自分に出来る事が分かったときには、全力を尽くして国際協力に貢献したい。



本人：前列右

研修で得た限りない宝物

種子島中央高等学校 3年 園田 広海

私はこの研修でみんなと仲良く楽しい思い出を作って、無事に家に帰ってきたい。マレーシアの人たちとの交流で様々なことを経験したいと思って鹿児島からホームステイ先のコタバルへ団員16名と同行者6名と共に空港から飛び立ちました。

出発する前に私は、第1回事前研修で述べた今回の研修に参加する中学生と高校生の研修に応募した理由とこの研修を通じての目標を一人一人思い出して私もそれに少しでも手助けが出来たらと感じたり、みんながこの研修で仲良くなれたらとも感じました。

団員のみんなは、話をしなそうなシャイな子もいれば、自分自身が思っていることをはっきり言う子もいて性格が全く違って、それは私にとって良いことだと思っただし、この機会でもみんなが思ってるみたいに触れあったことのない人と仲良くなろうと思いました。

鹿児島→韓国、韓国→マレーシアの首都であるクアラルンプールまで丸半日かけての移動でした。初の海外で、いつの間にか日本を出て、韓国の空港に着くと周りには日本人が私たちぐらいいきなくて急に不安や戸惑いを感じる気持ちになりました。飛行機内で6時間も過ごすことも初めてのことで、まさか機内でテレビを観たり、音楽を聞けたり出来るとは思いもしませんでした。

1日目のほとんどが移動でクアラルンプールのホテルに泊まりました。ホテルでも、鍵が開かなかったり、トイレの水が流れなかったりといったトラブルも起きたりして、これからの研修が心配になりました。

そして、2日目はマレーシアにあるJICAの事務所の表敬訪問をして所長の永江勉さんを始め、スライドショーで現在、マレーシアでJICAがどのような活動に取り組んでいるのかだったり、JICAの目的を知ることが出来る、最後には質問をして、私はJICAについてとても興味を持つことができ、3日目、4日目に青年海外協力隊員活動の視察で訪れた学校やダウン症や勉強の出来ない人たちを育成させる学校であるPDK(福祉局)で働く日本人の隊員の仕事姿や今の思っていることを知ることで私たち、研修に参加した全員が将来、海外でJICAのような仕事に就きたいと感じることが実際、活動に参加したり、目で見て経験することで出来ました。事務所の訪問が終わると、クアラルンプールの空港からホームステイ先であるコタバルへ1時間かけて行きました。

コタバルに着き、ホームステイ先のクバンテラガ村といった道路は整備されてはいるものの時速50km以上で走っているバイクや目でも速いと思えるようなスピードを出す自動車通っていて、周りには日本にはないような大きな家も建っていたりして、草原や森林もあって自然が溢れている地域でした。私たちは、その村の学校へ行き多くの学生にとっても歓迎されて、その日の夜にはその学校で歓迎会でみんなも大いに盛り上がりマレーシアの人たちの優しさや地域性に感動しました。その後、私たちはそれぞれのホストファミリーと過ごしました。ホストファミリーとの生活は、初日はやっぱり言葉の違いや宗教の違い、そして何よりも生活の仕方が日本と異なっていることに違和感があって抵抗がありましたが、時間が経つにつれてジェスチャーや指さし会話帳を使ってコミュニケーションを取ったりして4日間といった短い期

間を無事に生活することが出来ました。

その後、私たちは観光をしたりや中国料理を満喫したりして、今回の研修から様々なことを経験してケガや病気がなく私の好きな種子島に帰ってくることが出来ました。

私は、今回の研修で学生のリーダーとして周りの手助けや歌の指導など進んで行動していました。そして、それが原因で周りの人に迷惑をかけてしまい、様々な場面でいろんな人から助けをもらい、人は一人では決して生きていくことが出来ないと思いました。今回の研修に協力してくれた企業や私たちの親や団員のみんなやホストファミリーの人たちやこの研修に関わった人達に感謝の気持ちを伝えたいと思いました。そして、この研修で一人一人が出発前と海外についての考え方や将来への意志も変わり、得るものが多かったと思います。私も始めは海外の人に対して壁を作っていました、それも今回の機会を通じて壁が崩された気がします。

今、私は将来に向けて一生懸命やれることをやろうと頑張っています。それは、この研修で感じた事を様々な場所で子ども達に教えられるようにする場所を設けてもらえるように役場に頼んだりやこういう機会を増やしたりするよう頼んだりです。私は子どもでも何も出来ないけれど、私は研修を通じて様々なことを学んで、今後役に立つと感じたし、それを今の中学生や高校生に早いうちに経験して欲しいと思ったので私が今できる最大限のことを私は今、実際に行動しています。

いつか私たちの学校からこの研修でいろんなことを得て、その経験を話し合える後輩が出てくることを私は願っています。

私は、この1週間という短い期間の研修の思い出を一生忘れないと思います。

私にとってこの1週間の思い出は「宝物」です。



本人

「輝く未来への一步」

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長
 団長 弓場 秋信

鹿児島空港駐車場から国際線ターミナルに向かうと団員の顔が目に入る。一人一人の顔色をうかがいながら「サラマッパギ、アパカパール（お早う、元気）」と、声をかけると、緊張と笑顔が交差した表情で「カパールバイク（元気です）」と返ってきました。結団式で団員が述べる抱負を胸に留めマレーシアへと向う。異なる風景・言葉に包まれ、緊張を隠せない団員を乗せてバスはホテルに到着しました。

昨夜は目にしなかったツインタワーを始めとする高層ビルが立ち並ぶ街並みを横目に、国際協力機構（JICA）クアラ Lumpur 事務所に着。所長と所員より「国際協力とは、開発途上国の現状」について説明を受けました。「世界で学校に行けない子供たちが日本の人口と同じぐらい」の説明に衝撃が走りました。また団員から「将来国際協力の分野で活動するにはどの様な準備を」など、多くの質問が出ました。

首都から飛行機で約1時間。マレー半島北東部、タイと国境を接する人口約210万人が住むクランタン州の空港ペンカランチュバに到着。コタバル地区クバンテラガ村での民泊をアレンジして頂いたクランタン州ホームステイ協会の出迎えを受け村に向かいました。

空港から1時間余り、田園風景の中でひと際存在感を放つヤシの木、人口約2300人のクバンテラガ村に到着するとココナッツジュースや手製のお菓子での歓迎を受け対面式に臨みました。緊張の中発表されるホストファミリー。団員のつたないマレー語での自己紹介に双方笑みがこぼれて来た。ホームステイ先に家族と一緒に向かう団員に、「後で訪問するからね、何でも吸収・挑戦だよ」の声をかけ送りだしました。

4泊の5日のホームステイ期間中、福祉局クランタン州内知的障害者訓練施設を巡回指導している、体育、ソーシャルワーカー、作業療法士3名の活動現場と中高一貫校の特別支援教室を巡回指導している養護教員の活動現場2か所、4名の協力隊員を訪問しました。現地に溶け込み同じ目線で一生懸命取り組んでいる姿は、団員にとり憧れの存在となり、協力隊志望動機は、一番の喜びと辛かった事は、等を質問していました。また3名の女性隊員の中で2名は夫を日本に残しての単身赴任と聞かされ、「志の高さ」に畏敬の念を抱きました。

クバンテラガ村中学校で学生同士の文化交流が行われました。300人を超す学生の歓迎を受け、村人により用意された伝統マレー料理を現地学生と一緒に堪能した後、双方より歌・踊り・楽器演奏・書道・少林寺などが披露されました。事前研修とインチョン空港での待ち時間を利用して練習した団員は、マレー語の歌などその成果を披露

し大きな拍手を頂きました。学生同士の交流は、お互いに大きな刺激と思い出をもたらしたのではないのでしょうか。

1941年12月8日、今から70年前、当時の宗主国英国軍が守備するマレーシアを、日本軍が海上から攻撃しマレー半島上陸を果たした地がコタバルであり、太平洋戦争の火ぶたが切って落とされた所でもあります。そこでマレーシアと日本の歴史を知る機会になればと、その交戦の舞台となった海岸に現存する「トーチカ（鉄筋コンクリート製防御陣地）」と「戦争記念館」を訪問しました。親日的でホスピタリティーに富む心優しいマレーシアの人々を、戦争の被害者にした事実を記憶に留めてくれるでしょう。

この事業目的を理解し、より良い体験を可能にすべく準備をして頂いた国際協力機構（JICA）クアラ Lumpur 事務所、クランタン州派遣中の青年海外協力隊員、そして言葉の不十分さや生活習慣・イスラム教への理解不足から沢山の迷惑をかけたであろうが、家族以上の優しさで接してくれたクバンテラガ村の人々に心より御礼申し上げます。

団員の、現地訪問先での質問・述べた感想、鹿児島空港解団式での一言、帰国後関係先表敬での報告、報告会での「今後の進路」、16名の成長を実感できた瞬間でありました。この体験を通じて見つけた自分の夢・進路に向かって努力し、それが成就する事を希望しています。成長し輝く団員との再会を楽しみにしています。



本人：左（ホームステイ先にて）

感動・成長・期待！ マレーシア見聞録

(助)鹿児島県国際交流協会

総務企画課長 竹内 文紀

「今回の体験事業は、課長にマレーシアに行ってもらおうから」と4月に着任早々上司から言われ、私のマレーシア行きが決まりました。5か月以上にわたる「体験事業」のスタートです。県内から集まった16人の団員、6名の同行者で2回の事前研修を受けた後、7月24日、出発の朝を迎えました。正直なところ私の頭の中は「言葉が通じない、初めての東南アジア、どうしよう……」と不安だらけでしたが、たぶん、団員も期待と同時に、数々の不安を抱えていたことと思います。しかし、マレーシアに着き、クランタン州クバンテラガ村でのホームステイが始まると、「不安」は日に日に「感動」に変わっていききました。

団員は、覚えたてのマレーシア語、指さし会話帳、ジェスチャーを駆使し、積極的にコミュニケーションを取っていきます。手で食べる食事、水しかでないシャワー、マレーシア式トイレも何のその。そのたくましさと順応性に、私は舌を巻きました。毎日、同行者で団員の滞在先を訪問しましたが、そこには、ホストファミリーの子どもたちとサッカーに興じ、仲良く食卓を囲む団員の姿がありました。明日、クバンテラガ村を離れるという日に一人の団員がうつむきながら、こうつぶやきました。「あと1か月くらいここにいたらだめですか。」

団員やホストファミリーの皆さんの中に、互いの文化や習慣の違いを自然に受け入れ、理解し合おうとする、国境を超えた交流の一つの形を見た思いがしました。

団員に、もう一つ大きな印象を与えたのは、青年海外協力隊の活動視察でした。団員は、クランタン州の福祉施設で障がい者支援に取り組む高山隊員、捧隊員、藤原隊員の活動を、チェト中学校で特別支援教育に力を注ぐ奥村隊員の活動を視察しました。マレーシアの障がい者施策は、日本と比べれば、不十分な点があります。そのような環境の中にあっても、日本で学んだ知識や技術を

基礎に、決してお仕着せでない、地域に根ざした地道な支援活動続ける協力隊員の姿は、団員の心に鮮烈なインパクトを与えたものと思います。青年海外協力隊の活動を視察した団員からは、「僕は青年海外協力隊に参加することが夢でした。実際に活動を見て、必ずなりたと思いました。」、「私は介護福祉士を目指しています。介護の分野で青年海外協力隊に挑戦してみたい。」

との声が聞かれました。それは、目標が明確化されると同時に、そのために、今、自分が何をすべきかがはっきりと認識された瞬間だったと思います。

7泊8日の研修を終え、解団式の際に、自分の経験や将来の抱負を語り、「将来、青年海外協力隊に参加したい人」との問いかけに、迷わず手を挙げる団員に、私は彼ら、彼女らの成長の跡を感じました。私が同行者としてやったことと言えば、お金とパスポートの管理、荷物持ちぐらいです。しかし、例え「荷物持ち」でも、私はこの事業に参加させていただき、団員の皆さんの活動のお手伝いのできたことを誇りに思っています。

体験事業を通して、私自身、得難い、貴重な経験をさせていただきました。弓場団長、同行者の永山さん（協力隊ラオスOV）、山下さん（協力隊ベトナムOV）、山城さん（南日本新聞社）、松崎さん（鹿児島テレビ）、大変お世話になりました。有難うございました。また、共催市、協賛企業をはじめ、JICAデスクの力竹さんなど、関係の皆様から感謝申し上げます。

最後に団員の皆さんへ。今回の研修を通して、皆さんが得たものを大切に持ち続け、心に掲げた目標を達成することができるよう努力してください。うまくいかないことがあったり、壁にぶつかったりすることもあるでしょうが、そこは「Keep Smile!」で笑って乗り越えましょう。私はマレーシアで異文化交流を肌で体験し、国際協力の最前線を体感した皆さんが、将来、国際社会で活躍し、良い意味で世界と競い合える「人財」に成長してくれることを確信しています。

「課長」は、遠くから、皆さんの成長を見守っています。Jumpa lagi!（また会いましょう）。



本人：左



本人：後列左

気づくことの大切さ

青年海外協力隊・ラオスOG

永山 麻理

団員と初めて会ったのは、カピックセンターでの事前研修でした。私は、そこで自分よりマレーシアについてきちんと学習してきている団員に心強さを覚え、これから行く国マレーシアで、「〇〇がしたい」と主張している彼らの目標に、自分自身の気が引き締まる思いがしました。

マレーシアに降り立った時、初めに感じたことは、ここ（首都：クアラルンプール）は、大都会だということでした。こんな、大都会を持つ国の途上国といわれる状況をこれから感じるのだと思い、これからの8日間について想像し、緊張する部分もあり、初めてのマレーシア文化に正直わくわくしました。

実際にマレーシア人の生活文化圏に入ると、研修先・ホームステイさせてもらう村などで大歓迎を受けました。太鼓の音が鳴り、花火のように鮮やかな色のテープをつけた球体の飾り物で歓迎してくれます。そのマレーシア人の歓迎の様子に、団員は驚きながらも、日本から荷物と共に持ってきた不安を少しずつ取り除きつつ、各々の積極的な研修を促してくれましたように感じています。

私は、今回、調整役としてこの事業に参加させていただきました。このことで、2倍の気づきをさせてもらったと思っています。

1つ目は、団員の異文化に触れたときや国際協力について「何かに気がつく瞬間」、いわゆる輝く瞬間を目の当たりにできたことです。そして、それを楽しそうに受け入れ、学んでいく団員を見て、彼らの成長につながっていることを感じました。素晴らしい時間を共にできていることに気づかされ、元気をもらいました。

2つ目は、私自身がマレーシアという国の異文化に触れ、感動し、国と国が持つ「心」に多くの気づきを持ったことです。特に、ホームステイ先で、受け入れをしてくれた家族のお母さんや娘さんが、私のつたないマレーシア語を時には料理などの作業の手を止めてでも、正面に向き合って真剣に聞いてくれたことなどが、大変嬉しく感じました。このことで、改めて人と人が実際に接することの素晴らしさと大切さに気づかされました。



本人：右

「気づくことで 視点が変わる 視点が変わることで 考え方が変わる 考え方が変わることで 行動が変わる 行動が変わることで 習慣が変わる 習慣が変わることで 生き方が変わる 生き方が変わることで 人生が変わる」という言葉があります。

今回の事業をへて、私自身もですが、何より団員それぞれが国際協力に対し、より一層、自分を高める機会を得られたのではないかと思います。これから団員の未来にこの経験がどのように活かされるか期待したいと思います。

最後になりますが、この場を借りて、弓場団長（弓場貿易株式会社）、竹内課長（国際交流協会）など、本事業の諸関係者の皆様に大変御世話になりました。深く感謝申し上げます。私自身、素晴らしい経験と「気づき」をさせていただきました。本当にありがとうございました。



本人：右

クバンテラガ村で ホームステイ

青年海外協力隊ベトナムOG

山下 美穂

鹿児島県青少年協力体験事業「第20回目」という記念すべき節目の年に、同行者としてマレーシアを旅する機会を得ることができました。

健康管理担当として同行させていただいて、大きな病気を患うことなく皆無事に帰国できたことに、何よりホッとしています。忙しいスケジュールの中で体調を維持するのは大変なことです。団員の皆さんが自分の健康管理ができた事と、調子が悪いなど不調時に我慢せず教えて貰い、早めに対応できたことから、安心して同行することができました。団員の皆さんの協力に感謝しています。

言葉の通じないマレーシアへの同行は、団員の皆さんと同様に、マレーシア語やホームステイ、そしてイスラム圏での生活への不安と期待を抱えての出発でした。

私は、様々な国や民族の文化に興味を感じ、イスラム圏の国へも旅行に行った事があります。街中に流れるコーランを聞くと、異国情緒を感じてウキウキし、どこでお祈りしているのだろうと、気になったものです。しかし、今回ホームステイ先で家族と聞くその調べと、シンバツヤン（祈り）はとても生活に密着したもので、穏やかなものを感じました。また日本にいと「制限」と感じ易いハラール食は、材料が安心して購入できる場所では何不自由無く、とても美味しい食事に感じました。その分、鹿児島を初め、イスラム圏外で暮らすイスラム教徒の食生活は大変だろうと慮られました。

さて、ホームステイですが言葉が通じず大変でした。同行者の誰かと一緒にホームステイだから、その人に喋ってもらおうと、マレーシア語の勉強をすっかりサボっていたもので、言葉が…。ホームステイ初日、一生懸命関わってくれる家族の気持ちに、これはまずい！と「旅の指差し会話帳マレーシア語」片手に頑張りました。その

中で、相手が長い時間かけて伝えようとしても理解できない話題があり、お父さんが一文書いてくれました。翌朝、文章の意味を団長弓場さんに尋ねると「新しい名前を貰ったんですね。」と教えてくれました。ああ、そうだったのか！と、前夜の、家族とのやり取りが思い出されました。彼らは、私にマレーシアでの名前をくれたのです。何だかとても嬉しくて、直ぐにお父さんに「私の名前はSITI AMINAH（シティ・アミナ）です」と話しかけると、とても嬉しそうに「わかったの？」というそぶりをして、周りの住民へシティ・アミナとして紹介してくれました。

この、名前をもらった事は大きく、その後家族に受け入れてもらっていると感じられ、安心して、また積極的に過ごすことができました。また、隊員活動時代に任地で受け入れられたと感じた時の喜びを思い出しました。この体験事業の中で団員の皆さんは青年海外協力隊活動の視察を通して隊員活動を知る体験と、ホームステイ体験から任地に受け入れてもらう協力隊員の喜びの体験もできるのだと気づきました。私は今までも青年海外協力隊員として派遣されたベトナムへの体験事業へ同行したことはありましたが、今回の体験から研修事業にホームステイが組み込まれている意義を再確認することができたのです。体験事業すこい！

このすこい体験事業体験を、未来に向かって存分に生かして行く若い団員の皆さんの将来を期待しています！



本人：右から2番目

当事者の一人として

南日本新聞社編集局社会部

記者 山城裕司

先進国しか知らない私のマレーシア行きが決まったのは3月下旬。初の海外出張ということで、期待に胸をふくらませる一方、生活水準はどの程度なのか不安になったのを覚えている。

ホームステイで訪れたクバンテラガ村では地元の方々の温かい歓迎を受けた。滞在先の老夫婦は「マカン、マカン（食べて、食べて）」と家庭料理を振る舞ってくれた。中には日本では見慣れない食べ物もあったが、壁を作らず、とにかく口に運んだ。

うまかった。特に野菜と魚を煮たスープ。不健康な食事に慣れた胃に、愛情がこもった家庭の味が染みた。言葉で示せない感謝の気持ちを全部平らげることで表現。腹がふくれるにつれ、いつしかシャワー室にいるトカゲや蚊も気にならなくなった。

「1個千円もする高価品を残して申し訳ない」。家族が用意したドリアンを食べ残した日本の高校生の言葉を覚えている。多くの村人の年収が100万円に満たない中、振る舞ってくれた気持ちに胸が熱くなった。

帰国後、「参加した中高生の成長に期待」という趣旨の記事を書いた。この旅を、ただ楽しかっただけの修学旅行にしてほしくないと思ったからだ。しかし、記事を書きながら、自分も当事者の一人だということに気づかされた。現地には取材として参加。あくまで旅の主役は子どもたちだったが、記事を書くだけで終わるともったいないと感じた。

どのように将来に生かすか答えはまだ見えないが、「また旅行で来なさい」と言う滞在先の老夫婦や現地でできた友人の気持ちに応える。それが、「生かす」ことの第一歩につながると思う。



本人：右



本人：左

同行取材を終えて

鹿児島テレビ放送㈱

報道局報道部 記者 松崎 真紀

青年海外協力隊。誰もが知っている言葉ではあるが、多くの日本人がそうであるように、私にとっても身近な存在ではなかった。そんな私が、青年海外協力隊の活動を視察する中高生を取材する一。国際社会の中で私には何が出来るのか、今回の事業は、そう考えさせられる夏となった。

出発の日、生徒が鹿児島空港に集合するところから取材は始まった。夏の強い日差しは、取材に対する私自身の不安を助長させるものだった。わずか8日間で、中高生はどう成長するのか、それをどのようにして取材し放送につなげられるのか、そんな思いだった。

韓国を經由して、クアラルンプール、そしてホームステイ先のクバンテラガ村へ。取材でまず苦労したのが、車内での撮影だ。道路が、アスファルトで舗装されているものの、鹿児島と比べ凹凸が大きく、車窓からの街の風景が、撮っても撮ってもぶれてしまい、安定した映像が撮れなかった。そして中高生も移動続きで疲れた様子。前途多難の様相を呈していた。

しかし、村に到着すると、一変した。想像以上の歓迎ぶりに、中高生の笑顔が弾けた。このときの中高生の表情は、今回の事業の中で、最も印象に残るシーンの一つだ。そしてもう一つ、青年海外協力隊の隊員の姿も目に焼き付いている。異国の地で、現地の人のために生き生きと活動している姿を見ると、人としての器の大きさを感じた。私は敵わない。尊敬するとともに、私に出来ることは何かと考えさせられた。テレビ局に勤める一人として、まずは、隊員たちがどんな支援をして、現地でどんな存在になっているのか伝えなければならない。そして、それを見る中高生たちの姿や思いを通して、青年海外協力隊の隊員になりたい人が少しでも多くなれば、少なくとも視聴者に、私と同じように、自分が出来ることを考えるきっかけになってもらいたい。そんなふうに思いながら取材をした。

帰国後、KTSスーパーニュースで、現地での様子を3回にわたって放送した。社内からは、「目標を持った、しっかりとした中高生が多く、頼もしい」という感想をいただいた。しかし、私にとっては100%満足のいく

取材とは言えなかった。それは、中高生がホストファミリーとの別れのシーンで見せた涙だった。涙が流れるということは、それだけ深い絆を築いたということだが、私はその絆まで取材することが出来ていなかった。その点を放送出来なかったことは残念だが、その分、帰国後のインタビューで、中高生がこれからの目標を堂々と話す姿に救われた。中高生は、たった8日間で、一回りも二回りも成長していたのだ。この放送を見て、来年、この事業に参加したいと思ってくれる中高生が出てきてもらえたら幸いだと思う。

最後に、私事だが、マレーシアに行くのもホームステイをするのも初めての体験だった。蚊帳の中で寝ることも、もうないだろう。貴重な体験をさせていただいた関係者の皆様に、お礼申し上げます。



本人：右



KTSスーパーニュースより

第2回（平成4年度）派遣国；マレーシア 青年海外協力隊として エルサルバドルに派遣

青少年国際協力体験事業
第2回団員 江並 美香

第20回、鹿児島県青少年国際協力体験事業参加者の皆様、お帰りなさい。また、鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会の関係者の皆様、20年もの長きにわたり本事業の継続、ご成功をお祝い申し上げますと共に、本事業の卒業生でもあります私に本報告会への寄稿のきっかけを頂戴し、お礼申し上げます。

第2回の参加者としてマレーシアのスプランペラ村を訪れた事を未だに最近の事のように思いだすのですが、早いものでもう約20年が経とうとしているのですね。その間いろいろありましたが、当時から興味を持っており本事業でも多くのOB/OGの方々が活躍された青年海外協力隊隊員として、2009年6月から中米のエルサルバドルという国で感染症対策隊員としての活動を行い、この6月に無事2年間の任期を終えて帰国いたしました。7月から復職し東京在住しております。

この機会に高校生の頃に参加した体験事業を振り返ってみると、その後の人生に大きな影響を受けている事を痛感しますが、今このタイミングで抱く一番の思いとしては“自ら行動することの大切さ”を身を持って感じたことでしょうか？ 私は第2回の参加者ですが、正直なところ、第2回の公募を新聞で見つけるまでは第1回目の事も全く知りませんでした。とはいえ、当時は既に国際協力の場で公衆衛生・感染症対策に携わりたいと大学進学を目指していた私は、その第2回の募集を見つけると応募を即決、両親へは相談というより事後報告でした。幸い相談ベースではない事を怒る事はもちろん、私の言動に驚く事もなく、選考書類の送付や選考会への送迎等積極的に支援をしてくれました。一方当時の学校の関係者は、前年の私とその存在を知らなかったように、先生方も生徒も私が参加すると話をするまで誰一人として本事業を知らず、また、受験まであと1年も無いのに10日程度とはいえ何を呑気に途上国へ・・・と否定的な反応をされる方もいました。

この様に、私の事例で行くと、体験事業は公募であり、機会は当時の中高校生に公平に与えられていましたが、それに気づけるかどうか？ どう捉えるかで？ その人にとってチャンスなのか？ だとすればつかむことができるか？ に差がでたのだと思います。

また、実は私、その後も学生時代に2度、それも1度はマレーシアのフィールド見学を含む、それぞれ約10日程度の国際協力関係の研修に参加しました。費用？ もちろん主催者負担だったので自己負担なしです！ いずれも

自分で募集を見つけ、募集要綱を取り寄せ、志望動機等の小論文を書き、研究室の先生に推薦書をお願いしたりして応募した結果です。

自分の将来に志や夢を持っていたり、もっと深めたい知識や技術が既にある方。夢は抱くだけではなく実現するもの。その為に精進することはとても大切ですが、ピンポイントのゴールだけを見ていると行き詰ったり、全体が見えなくなって迷路に迷い込むこともありがちです。なので、広くアンテナを伸ばす事、可能性を広げることを忘れないでくださいね。

もしまだ具体的なイメージを持っていない方。まずは好きな事や何かに興味を持つことから初めてみてください。きっとそこから道が開けていくと思います。

泣こかい 飛ばかい 泣こよかひっ飛ば！

末筆になりましたが、皆様のご活躍を、そして本事業のますますのご発展をお祈りして結びの言葉とさせていただきます。



エルサルバドルにて



学校検診、地域巡回検診に同行してしての認識度調査（エルサルバドルにて）

第3回（平成5年度）派遣国；マレーシア 青年海外協力隊として キルギスに派遣

青少年国際協力体験事業

第3回団員 濱田 孝子

この度は青少年国際協力体験事業20周年おめでとうございます。

私は体験事業第3回でお世話になりました浜田孝子と申します。

お祝いの言葉を送らせていただきます。

私が体験事業で参加させていただきましたのは中学3年生のときでした。

当時、「発展途上国」に行くということは、外国に行くのも初めてだった私にとってとても貴重な体験でした。マレーシアのテラガアイール村でのホームステイ。言葉や人、文化、宗教など違う中で初めは緊張と戸惑いばかりでしたがそれを解いてくれたのは現地の方々でした。言葉が通じなくてもまるで家族のように優しく接してくださり、たった4日間のホームステイでも別れを惜しんで泣いてくれました。

現地で活動されている協力隊員の方々の活動現場を見学させていただき、そこで初めて青年海外協力隊の存在を知りました。ある隊員さんの「現地の方と共存すること」という言葉が印象的でした。



キルギス共和国



本人：中央（キルギスにて授業）

それから約10年後私も協力隊の音楽隊員としてキルギスへ赴任するのですが、その意味を身をもって教えていただけた気がします。いくらいい技術を持っていったとしても信頼関係を築かなければ相手には受け入れてもらえないということ。そして上からではなく同じ目線になって一緒に活動していくということ。

これは、私の人生に於いて大きな”気付き”でした。中学生の時に体験した国際交流が私の人生において貴重な体験となっていることは言うまでもありません。

会長弓場さんをはじめとする関係者の皆様の熱意、OB・OGの方々の協力を敬意を表します。そして何よりも受け入れ先各国の現地の方々の温かい人柄と優しいお心遣いに感謝いたします。

これからもこの体験事業が永く続いて行きますよう、祈りを込めてお祝いの言葉に代えさせていただきます。



本人：前列左（キルギスのクラス）

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
(財)鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経 費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

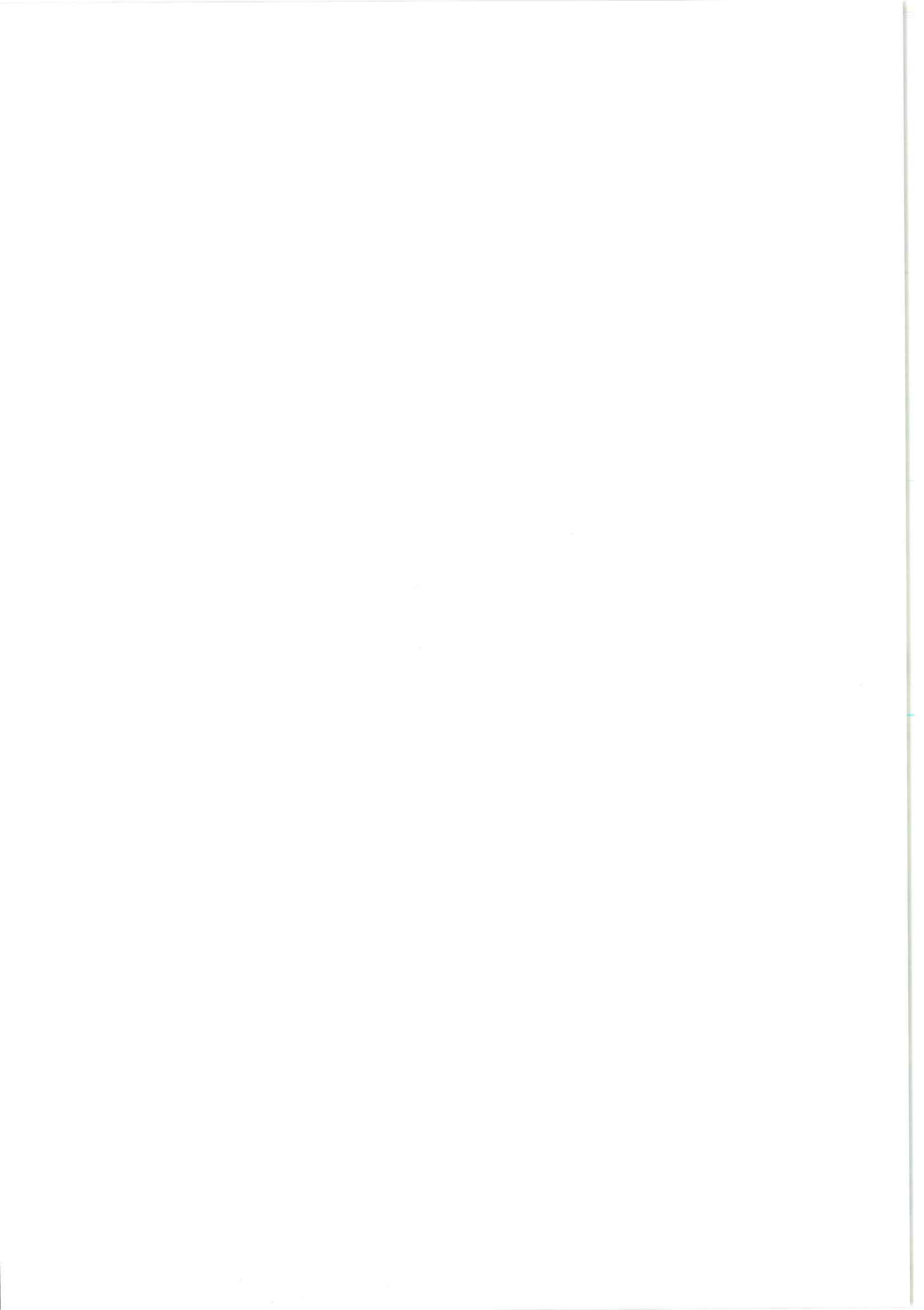
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル, サリマンドゥ)	平成3年 3/27(水)~4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 祁答院町, 内之浦町, 佐多町	公募
第2回	マレーシア (スプランベラ)	平成4年 3/27(金)~4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成5年 7/23(金)~7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン, パシールカリキ)	平成6年 8/1(月)~8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)~8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市, 国分市, 穎娃町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイピン, パリットムントリー)	平成9年 7/27(日)~8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成10年 7/26(日)~8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 始良町, 蒲生町, 溝辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町	市町村推薦
第8回	タイ (アユタヤ, ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)~8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (チェンマイ, メーカンボン)	平成12年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 財部町, 末吉町, 串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン, フーホイ)	平成13年 7/20(金)~7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 溝辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン, タンビン)	平成14年 8/4(金)~8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 溝辺町	市町村推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー県 を予定していた)	平成15年 SARS及び鳥インフル エンザの影響により中止			市町村推薦 予定
第13回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, トレンガヌ州)	平成16年 7/19(月)~7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第14回	ベトナム (ハノイ, ホアビン省, モーハイ村)	平成17年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 枕崎市, 串木野市, 国分市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第15回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, サバ州)	平成18年 7/22(土)~7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第16回	ベトナム (ハノイ, バクザン省, バクニン省)	平成19年 7/22(日)~7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 枕崎市教育委員会, いちき串木 野市, 霧島市教育委員会, 南さつま国際交 流推進協議会, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県ボンミー村)	平成20年 7/20(日)~7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市国際交流協会, 霧島市国 際交流協会, 南さつま国際交流推進協議会 南九州市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県ナーソン村)	平成21年 7/19(日)~7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, いちき串木野市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第19回	インドネシア (南スラウェシ州, ピナバサ村)	平成22年 8/1(日)~8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
	計5カ国		計220 (平均12人)		

第20回(平成23年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書の以下の点に誤りがありましたので訂正致します。ご迷惑をおかけしたことをお詫び致します。

正誤表

訂正箇所	正	誤
もくじ(同行者感想)	松崎真紀	松崎真紀
P3(同行者)	<small>まつさき まき</small> 松崎真紀	<small>まつさき まき</small> 松崎真紀
P5(ホームステイ先)	松崎	松崎
P32(55行目)	松崎さん(鹿児島テレビ)	松崎さん(鹿児島テレビ)





Pengunjung boleh sampai ke
 Kubang Telaga dari
 (teks) sawah
 ini meliputi
 oleh yang dikellingt
 bendang / sawah
 Puteh.
 4 km
 dari

stay Kg. Kubang Tel
 after 40 folks
 ch organizer
 s home
 Kelantan
 Cradle

= 編集・発行 =

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816

鹿児島県鹿児島市山下町14-50 かごしま県民交流センター1階
 (財)鹿児島県国際交流協会内 担当：力竹 貴子、田丸 奈保子

TEL：099-221-6620 FAX：099-221-6643

絵：豊留 春菜(鹿児島県立松陽高等学校3年)



RM40
 RM20.00
 RM10.00—
 B. Pakej 2 : (Satu hari &
 - Bayaran Perkepala (RM20.00—umur 15 tah.

ceer-
 MALAYS